

「マリンウォッチング研修」実施要領

国立江田島青少年交流の家

1 内容

本所施設に隣接する荒代海岸で、海辺の生物の観察や採集を行う。

2 ねらい

- ・海辺の生物採集を通して、海洋生物の形態や生態を知る。
- ・生き物の種類や数から、海辺の環境状態を知る。

3 対象者

小学校第 4 学年以上。ただし、保護者又は引率者がいる場合は小学校第 3 年以下でも実施可能。
※幼児はライフジャケット着用。

4 人数

最大 100 人（他団体と活動が重複する場合は調整する）。
4～5 人で班を構成し活動する。
※9 人以上で実施可

5 実施場所、実施時期、研修時間

- （1）実施場所 荒代海岸（交流の家より片道徒歩 20 分程度）
- （2）実施時期 5 月～11 月
- （3）研修時間 干潮時潮位 60 c m 以下の日
9 時 00 分～16 時 00 分のうち干潮時刻の前後 1 時間を含む 3 時間

6 実施の可否

（1）判断時期

- ① 研修 1 時間前
- ② 活動実施中…随時

（2）実施の可否基準

以下の①～⑧の場合、活動を実施しない。

- ① 台風が接近している場合
- ② 強風注意報及び暴風警報が発表されている場合
- ③ 大雨注意報及び大雨警報が発表されている場合
- ④ 波浪注意報及び波浪警報が発表されている場合
- ⑤ 津波注意報及び津波警報が発表されている場合
- ⑥ 雷鳴がしている場合
- ⑦ 原則、熱中症暑さ指数（WBGT）31℃または気温 35℃以上の場合
- ⑧ その他、特に海辺の生物採集に不適切と判断した場合

（3）実施の可否の連絡方法

① 6（1）①の場合

交流の家職員（以下「職員」）から、8（2）①の総括責任者に連絡する。

② 6（1）②の場合

- ア 常に天候に関する情報を入手し、（2）の可否規準に基づいて交流の家所長が判断する。
所長が中止を判断した場合は、職員は総括責任者に知らせる。
- イ 総括責任者が中止を判断した場合は、直ちに総括責任者から交流の家に連絡する。



荒代海岸トイレ・倉庫

7 準備物

(1) 個人

準備	☐ 観察に適した服装 ☐ 濡れてもよい靴（長靴も可） ☐ 軍手 ☐ タオル ☐ 帽子 ☐ 飲み物
必要に応じて	☐ バインダー ☐ 筆記用具 ☐ ビニール袋等

(2) 引率者

準備	☐ 携帯電話 ☐ ホイッスル
必要に応じて	☐ デジタルカメラ ☐ タブレット端末（調査用） ☐ 救急バッグ（貸出可）

(3) 交流の家

準備	☐ 指導用資料1～3（各1） ☐ 海辺の危険生物のシート ☐ 海辺の生物シート ☐ レスキューチューブ ☐ ブルーシート ☐ 手網（またはアクアリウム用手網） ☐ バケツ
必要に応じて	☐ ミニスコップ（またはミニ熊手） ☐ 観察用クリアケース ☐ ホワイトボード ☐ マーカー ☐ ハンドマイク
片付け時に使用する物	☐ 角型ジャンボタブ ※洗浄後、ケースに入れる、重ねる等して倉庫に収納する。 ☐ シャワーホース※トイレの水道を利用

※貸出物品を紛失した場合は実費負担の弁償となる。

使用備品例



手網



アクアリウム用手網



ミニスコップ



バケツ



角型ジャンボタブ



シャワーホース

8 指導・安全管理

(1) 指導者の配置・人数・役割分担

団体は「マリンウォッチング研修」実施要領をもとに指導・安全管理等を行う。

(2) 引率者の配置・人数・役割分担

団体は次の役割を担う。（小規模の団体は担当を兼ねることができる）

- ① 総括責任者（全体の総括・指導）…1人
※実際の引率指導に当たっている団長（学校長、教頭、学年主任等）
- ② 指導担当者（用具の準備・後始末の指示、指導及び安全管理）…1人以上
※事故があった場合救助に向かう引率者
- ③ 監視担当者（監視及び安全管理）…1人以上
- ④ 救護担当者（健康観察・応急処置・AED設置場所の確認）…1人以上

(3) 事故発生時の措置

- ① 総括責任者：事故の状況を把握し、交流の家に連絡をする。ただし、緊急時には、直接江田島消防署、江田島警察署、第六管区海上保安本部に連絡を入れ、その後交流の家に連絡をする。
- ② 指導担当者：事故現場付近に速やかに行き、レスキューチューブで救助する。
- ③ 監視担当者：事故をホイッスルで直ちに知らせ、全員を安全な場所に集合するよう指示し、人数、名前を確認する。

- ④ 救護担当：応急処置を行う。

事故発生の際が交流の家にあった場合、所長は複数の職員を現場に派遣し、救助、応急処置に加わせるとともに、搬送用の車を手配する。緊急時には、江田島消防署、江田島警察署、第六管区海上保安本部に連絡を入れる。(①ですすでに連絡済の場合、不要)

9 展 開

- (1) 「マリンウォッチング研修実施届」及び「宿泊者名簿（または名簿）」（以下「実施届等」）の提出

団体は、実施届（及び物品利用希望書）に必要事項を記入し、10日前までに交流の家に提出する。

- (2) 交流の家出発

(指導担当者)

- ① 交流の家（事務室）から必要に応じて、救急バッグ（1）、ハンドマイク（任意）を受け取る。
- ② つどいの広場又は、海洋研修室前に（雨天時はピロティ）に班毎（4～5人）に整列させる。
- ③ 救護担当者に健康観察を行わせる。
- ④ 参加者、見学者、引率者の人数、名前を確認する。
- ⑤ 交流の家職員に出発・活動終了時刻を報告し、班毎に2列縦隊で荒代海岸に引率する。
(指導用資料1 参照)
- ⑥ 荒代海岸トイレ横倉庫から観察に必要な使用備品を職員から受け取る。

※準備時に、角型ジャンボタブに水を貯めるなどしておくとし終了時の片付けがスムーズにできる。

- (3) 事前指導

(指導担当者)

- ① 浜辺に班毎に整列させる。
- ② 救護担当者に健康観察をさせる。
- ③ 参加者、見学者、引率者の人数、名前を確認する。
- ④ 目的及び活動の留意点を説明する。
- ⑤ 注意事項を説明する。

水辺活動は特に危険を伴い、事故は死につながります。次の注意事項を確実に遵守してください。

- ・班員とともに行動する。
- ・指導者の指示に従い、悪ふざけや勝手な行動は絶対しない。
- ・体調が悪くなったら、早めに活動をやめ、指導者に連絡をする。
- ・体調不良者は海辺の観察をしない。
- ・事故を目撃したら直ちに大声で叫ぶ。指導者、引率者に知らせる。
- ・決められた観察区域から出たり、ひざ上まで水に入ったりしない。
- ・岩場には付着した貝が多くケガをしやすいので十分注意をする。
- ・危険生物（指導資料4）を見つけたら、さわらないで指導者を呼ぶ。
- ・石をひっくりかえして観察する場合、観察後には石をもとに戻す。

- ・必要以上に生物を採集しない。
- ・はだしになって活動をしてない。
- ・トイレに行く場合は必ず指導者に伝えてから行く。
- ・見学者は勝手な行動をしない。

⑥ 採集時間の設定及び活動範囲、観察に適した場所について説明する。

※ 1 採集時間は1時間～1時間30分程度で設定する。

※ 2 藻場、砂の中、石の下に生物が多く生息している。

⑦ 海辺の生物シート、海辺の危険生物のシート等を班に配布する。

海辺の生物（アラムシロ等）を使った生態観察が可能であること等（指導用資料3 参照）

⑧ 海辺の危険生物シートをもとに危険生物について説明する。（指導用資料4 参照）

ア 海辺の危険生物のシートを見せ、説明する。

イ 指導資料4を見せながら説明する。赤枠は毒性が強く危険なのでさわらないこと、黄枠はけがをしやすいので注意が必要なこと、何かあった場合にはすぐに、引率者に伝える。

（4）活動の実際

（指導担当者）

① 班毎に、用具を配付し、観察、採集を始めさせる。

※場所、生きものの特徴等、研修生に観察の視点をもたせる。

② 監視担当者に監視をさせる。

③ 定期的に物品がそろっているか確認させる。不足している場合は班で探させる。

④ 採集終了、集合させる。

ア 班毎に整列させる。

イ 実施届で参加者の人数の確認をする。

ウ 救護担当者に健康観察をさせる。

エ イウの状況を総括責任者に報告する。

⑤ 使用備品等を回収し、クリアケースを配る。

⑥ 班毎に、採集した生物をクリアケースに入れ観察させる。

ア 採集した生物を海辺の生物シートで調べ、仲間分けをする。（貝類・海藻類・魚類等）

イ 生物を観察し、班毎に感想を交流する。

ウ 班毎に採集した生物の中から、他の班に紹介したい生物を1つ選ぶ。

エ 各班から生物と捕獲場所、視点からの気づき等の紹介と感想を発表させ、全体で交流する。

⑦ 交流の家に、携帯電話で活動が終了したことを伝える。

⑧ まとめをする。

（5）活動後

（指導担当者）

① 採集した生きものを海に返させる。

② 貸し出された物品を回収・数量確認し、角型ジャンボタブで洗浄する。その後、ケースに入れる、重ねる等して、職員立ち合いのもと、倉庫に返却する。

③ トイレの掃除をさせる。

④ シャワーホースで、研修者の手足を洗う。

- ⑤ 持参物を確認し、持参した物品は必ず持ち帰らせる。
 - ⑥ 角型ジャンボタブ、シャワーホース等使用した備品を片付ける。
- (6) 荒代海岸から交流の家へ出発
(指導担当者)
- ① 班毎に整列させる。
 - ② 救護担当者に健康観察をさせる。
 - ③ 参加者、見学者、引率者の人数、名前を確認する。
 - ④ 2列縦隊で交流の家に引率する。
- (7) 交流の家帰着
(指導担当者)
- ① 参加者、見学者、引率者の人数、名前を確認する。
 - ② 救護担当者に健康観察をさせる。
 - ③ 更衣等の諸連絡をし、解散する。
 - ④ 事務室から貸出物品を返却するとともに、マリンウォッチング研修が終わったことを報告する。

10 連絡先

	一般電話番号	緊急通報用電話番号
江田島消防署（救急係）	Tel 0823-40-0358	119
江田島警察署	Tel 0823-42-0110	110
第六管区海上保安本部	Tel 082-251-5111	118
江田島青少年交流の家	Tel 0823-42-0660 0823-42-0661	

指標生物による水質判定

海の生き物のなかには、水が汚れている場所に多くみられる種類と綺麗な水の場所で多くみられる種類があります。いろいろな場所で生き物と水質を調査し、水の汚れと関係が深い生き物を指標生物として選び、それに点数をつけることで水質判定をすることができます。

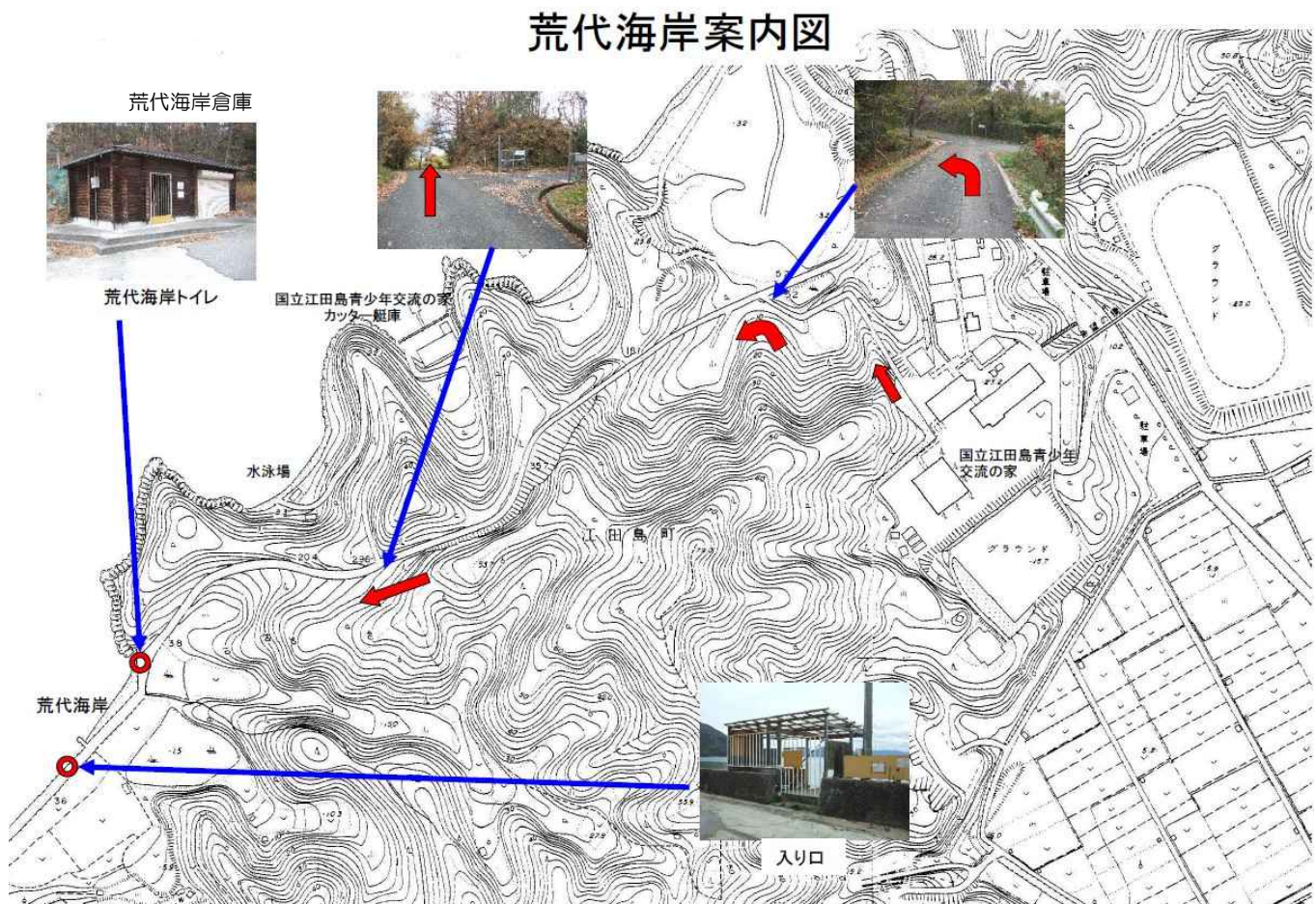
具体的には「広島県海岸・干潟生物調査マニュアル」をご覧ください。これは、パソコンのインターネットに同名を入力することで検索できます。準備物から調査方法まで掲載されていますので参考にしてください。

なお、「広島県海岸・干潟生物調査マニュアル」の中に掲載されている「水の汚れの指標生物」及び「生物調査記録用紙」は当所で貸し出します。



広島県海岸・干潟生物調査マニュアル

指導用資料 1



指導用資料 2

海辺の生物を使った生態観察

自然の中でたくましく生きようとする生物の姿を観察することができます。

1 アラムシロの観察

- ◎ 死肉のにおいを感じし、死肉に群がる。海の掃除屋として海をきれいにしている。

〈手順〉

- ① アラムシロを水の流れの上流と下流に置く。
- ② 中央にマテガイ等の死肉を置き観察する。

〈結果〉

下流のアラムシロが死肉に群がる。上流のアラムシ



ロも遅れてやってくる。

2 マテガイの観察

◎ 外敵から身を守るため、自力で穴にもぐり身を隠す。

＜手順＞

- ① だ円形の穴をさがし、塩をひとつまみ入れる。
- ② マテガイが出てきたら、やさしく引き抜く。
- ③ マテガイを穴の近くに横たえ、観察する。

＜結果＞

殻の前端からくさび型のあしを出し、殻を地面に対して垂直にしながらもぐっていく。



3 ヒトデの観察

◎ 体が裏返ってしまっても、触手を上手に使いもともどり、外敵から身を守る。

＜手順＞

- ① クリアケースに海水を入れ、ヒトデを裏返して置く。
- ② 観察をする。

＜結果＞

触手を上手に使い、体をそらして、もとのように（表）もどる。

- 砂の上、石の上、海水なし等、条件を変えて比較観察してもよい。
- バフンウニを使っても同じような観察が可能



海辺の生物の種類(荒代海岸)

アラムシロ

砂泥地に棲息する。殻は紡錘形で灰色をしている。



マテガイ

砂底に楕円形の深い穴をあけて棲息する。穴に食塩を一つまみ入れると飛び出してくる。





マヒトデ

岩場や石のうらに付着している。

イトマキヒトデ

岩場や石のうらに付着している。



バフンウニ

岩場や石のうらに付着している。



海辺の危険生物①

アカクラゲ



かさの表に16本の太いすじがあり，触手が長い。
触手には毒があり，さされるとひどく痛む。

海辺の危険生物②

ハオコゼ(カラコギ)



背びれ，腹びれ，尻びれのとげに毒があり，さされると非常に痛い。

海辺の危険生物③

ゴンズイ



体は細長く黒褐色で、2本の黄色い線が入っている。幼魚は群れをなし遊泳する。背びれと胸びれに毒腺があり、刺されると痛い。

海辺の危険生物④

スナイソギンチャク



触手が伸びると20 cmにもなる大型のイソギンチャク。白点には毒があり、触れると痛い。

海辺の危険生物⑤

ウミケムシ



砂地に棲息する。
体の両側に白く細長い剛毛の束がある。これに触れると激しい痛みがあり、皮膚炎を起こす。

海辺の危険生物⑥

マガキ



岩に付着して生息している。
端の部分が鋭利であるため、手足を深く切る恐れがある。

海辺の危険生物⑦

ムラサキウニ



多数のとげにおおわれている。
毒はないが、とげがささると痛い。

海辺の危険生物⑧

オオヘビガイ(マガリ)



岩に付着して生息している。
端の部分が鋭利であるため、手足を深く切る恐れがある。

ガザミ



砂底に棲み, ハサミにはさまれるととても痛い。採取する場合は, 後ろから甲羅をつかむとよい。